

極楽浄土における諸相と共生に関する研究Ⅱ

―諸仏世界との共生の可能性―

袖山榮輝

はじめに

標題の研究についてすでに筆者は「Ⅰ」として、いわゆる魏訳『無量寿経』をテキストに用い、「『無量寿経』における極楽浄土に存在する者」と副題を冠した論考を本誌に発表した¹⁾。

『無量寿経』（以下『寿経』）においては、無量寿仏（すなわち阿弥陀仏）の仏国土である安楽国（すなわち極楽浄土、極楽）には、無量寿仏を除くと、菩薩・声聞・天・人の四者の存在を確認することができた。ただし、その実態においては、四者はみな同様の容姿、能力を有する菩薩であると読み取ることができ、四者が極楽に往生する以前に生存していた世界に因んで、それぞれの呼称が用いられているのであった。

『寿経』における無量寿仏の四十八願とその成就に関する説示にしたがえば、極楽に存在する者、すなわち極楽の住人は往生以前の自身の記憶について遙か遠い過去にまで遡って知ることができ（第五宿命智通願²⁾とその成就）、一方では他人の心中を察することができる（第八他心智通願³⁾とその成就）とされる。同じ容姿である極楽の住人が個々を識

別するにあたっては、そうした能力（神通力）を働かせるのである。

さて極楽の住人がこの二つの神通力を含めた六神通などを具えているということについては、以下の三点が期待される。

① 極楽に存在する者（菩薩）同士、相互に各々の過去の有りようについての認識を共有して否定せず、心中を理解し合う関係が構築されること。

② 極楽に存在する者（菩薩）同士、極楽以外の仏国土の衆生における過去、現在、未来の有りよう、その心中についても認識を共有する関係が構築され、他仏国土の衆生が往生してくればみな一様に受け容れること。

③ 極楽の存在する者（菩薩）同士、他の世界の衆生に対して共同して利他の活動を展開すること。

本研究Ⅰにおいては、こうした点に極楽における「共生」の理念を見出そうとした。研究Ⅱと位置付ける本稿では、『寿経』が説き示す極楽の様相のなかに、上記②③のような期待を實際に展開させようとして極楽の環境を整える『寿経』の試みについて言及してみたい。

具体的には無量寿仏の四十八願中、第三十一国土清浄願と第四十見諸仏土願の関係を論じながら、極楽浄土に諸仏国土の様相が通じていることを確認し、そのことが極楽の菩薩にとって他仏国土に存在する者との共生を志す、そうした動機を生み出す契機となり得る可能性を指摘する。なお研究Ⅰと同様に『寿経』の底本には『浄土宗聖典』第一巻収載のものを用いることとする。

一、問われる諸仏国へのアプローチ

『寿経』が説示する無量寿仏の四十八願のうち、第五願から第十願の六願において順次、六神通が取り上げられ、極

衆の人天に六神通が具わるよう誓われている⁴。この人天における六神通の具足について言えば、例えば第六天眼智通願⁵、第七天耳智通願⁶、第八他心智通願の三願が成就するという組み合わせにより、少なくとも百千億那由他にも及ぶ仏国に向けて視力、聴力といった能力を発揮し、同様にそうした仏国に存在する者の心の読み取りにおいても能力を発揮するのである。

その結果、前節の②のうち、極楽に存在する者（菩薩）各々が極楽以外の仏国土に存在する者（衆生）について、その姿形や振る舞い、声色や発言、思考や感情を認識し、その情報は極楽の存在する者同士において他心智通により共有され得るのであり、さらに天眼智通に未来を見通す能力も含まれることを鑑みれば、衆生個々における今生以後の未来のありようについても共有されるのである。また例えば『仏所行讚』において宿命智通は衆生個々における今生以前の過去のありようについても認識が可能であるとの前提に基づく叙述のある⁷ことを鑑みれば、極楽に存在する者は他の仏国土の衆生における過去・現在・未来にわたるすべての情報について共有すると見なせるだろう。

このように極楽に存在する者は他仏国の衆生に関する情報を完全に把握することが可能であり、加えて神境智通の成就により、一瞬のうちにも少なくとも百千億那由他もの仏国を通過する能力を具えることになる。こうした点から②③への期待が高まるのである。

ところで極楽に存在する者にとって、他の仏国土の様相は具体的にいったいどのように知見されるのであろうか。その様相が直接、網膜に映し出されるのであろうか。あるいはそこまで直接出向いて知見するのであろうか。極楽から諸仏国への接触、アプローチが問われるのである。

筆者は現在、『寿経』四十八願を精読する機会を与えられている⁸が、こうした点は四十八願を読み進めるうちにおのずと明らかになる。じつは極楽浄土は一切の諸仏世界を映し出すほど清浄であるように誓われ（第三十一国土清淨願）、

加えて極楽の菩薩たちがその諸仏世界を観察できるようにと誓われているのである（第四十見諸仏土願）。

二、極楽における諸仏世界の照見

『寿経』の四十八願中、無量寿仏が自身の仏国土（極楽浄土）に関して誓う願い（摂浄土願）は第三十一国土清浄願と第三十二国土嚴飾願の二願にとどまる¹⁰。いずれも他の世界とのかかわりをテーマとする誓願である。このうち第三十一願は、極楽において他の諸仏世界を知見する環境を整えようというものである。では、その環境はどのような整えられるのか。以下に、その願文を示してみる。

【『寿経』第三十一国土清浄願】

設我得佛国土清浄皆悉照見十方一切無量無數不可思議諸佛世界猶如明鏡觀其面像若不爾者不取正覺¹¹
あわせて書き下し文を示しておこう。

【書き下し文】

もし我れ佛を得たらんに、国土清浄にして、皆悉く十方一切無量無數不可思議の諸佛世界を照見せんこと、なおし明鏡をもつてその面像を觀（み）るがごとくならん。もししからずんば、正覺を取らじ。¹²

まずは願文の後半に「鏡をモチーフとした比喩」¹³が用いられていることに注目が集まるだろう。この比喩が願文の「国土清浄」以下、前半部分を修飾する。比喩の対応関係については「国土清浄」が「明鏡」に喩えられ、「諸仏世界」が「面像」に喩えられ、「照見」が「觀」に対応するものと思われる。

さて比喩である以上、「照見」という作用が「觀」という作用を想起させるものでなければならぬ。「照見」について仏教語の辞典を参照してみると、例えば「物事の本質や実相を正しく明らかに見極めること。また、その正しい道理」

〔石田瑞麿『例文仏教語大辞典』小学館〕と説明するが、ここでは「映し出す」（白川静『字通』平凡社）といった意味に捉えるのが妥当であろう。ここでの「照見」は目的語に「諸仏世界」を据え、「諸仏世界」を「映し出す」といった意味で用いられるのである。

一方、「観」は書き下し文において「みる」と訓読されるように、「みる」（前出『字通』）が基本的な意味と言え。それに従えば「面像を見る」ということになるが、その比喩の対象は「諸仏世界を映し出す」にある。この「国土が諸仏世界を映し出す」と「面像を見る」の対応関係をめぐっては、じつは「一捻り」と言うべきか、あるいは「一工夫」「二手間」が加えられている。比喩における対応関係のなかで、能動から受動へと表現方法の転換が図られているのである。

どういふことかと言うと、比喩の対象である願文の前半部分は、「国土」が「清浄」であって「諸仏世界」を「照見」する（映し出す）というように、主語である「国土」の視点から能動的な表現が示されている。それに対し後半部分の「鏡をモチーフとした比喩」においては「面像」を「観」る（見る）とあり、一見、能動的であるかのように見えるのであるが、じつは「観」の主語が審らかでない。仮に「明鏡」を主語にしたところで、鏡が自ら面像を見るところという状況は成り立たない。「観」を「見る」の意味で捉える限り、「明鏡」は「面像」の所在を示すための補語といった位置付けとなる。すなわち「明鏡」は、「照見」の主語として能動的な側面を見せる「国土」と比喩として対応関係にあるものの、「観」の主語ではなく目的語「面像」の所在を示す補語として登場し、「明鏡」においては「面像」とともに見る側ではなく見られる側として受動的な立場への転換が示されているのである。

では、そのような転換が何故に示されるのであろうか。ちなみに「観」を「見る」と解釈する場合、その動作主として不特定な誰かが想定され、「面像」が見られる側として受け身の立ち位置にあることが示唆される。そのことが翻って

「照見」の目的語である「諸仏世界」についても、それを見る動作主が存在すること、さらには「諸仏世界」が見られる側にあることを示唆しようとしているからではないだろうか。

『寿経』第三十一願においては、極楽が諸仏世界を映し出す（照見する）という環境が整うよう誓いつつ、「鏡をモチーフとした比喻」を用いることにより、諸仏世界について誰かに見られる側にあると位置付けようとし、その動作主、すなわち観察者の存在を予想させようとするのである。

ただし「観」には「みる」のほかに、「しめす、あらわれる」（前出『字通』）といった意味があるとされ、ここでそうした意味を適用させてみるならば、「明鏡」が主語であると捉えられなくもない。もし、そうした可能性に実現味があるならば、「諸仏世界」について誰かに見られる側であり観察者の存在が示唆されているという上記の指摘を取り下げねばならないのである。

そこで次に「鏡をモチーフとした比喻」について異本を対照させ、「明鏡」が主語となるパターンがあり得るか確かめたい。

三、明鏡は主語たり得るか 、『寿経』第三十一願に对照される異本をめぐって

周知の通り、いわゆる「無量寿経」は漢訳において「五存七欠」といわれるように十余りに及ぶ漢訳経典の記録があり、そのうち五つの経典が今現に伝えられている。その他にも梵文による無量寿経（以下『梵本』）、チベット語訳の無量寿経があり、これらがいわば無量寿経経典群を形成する。総じて「無量寿経」と位置付けられたりもするこの経典群は、経典成立の前後関係から「初期無量寿経」「後期無量寿経」などと分類されることがある。『寿経』は「後期無量寿経」に位置付けられる。同じく「後期無量寿経」に位置付けられ、『寿経』より訳出年代が下る経典に菩提流志訳『無量

寿如来会』（以下『如来会』）と法賢訳『無量寿莊嚴經』（以下『莊嚴經』）がある。

無量寿經が無量寿經である重要な条件の一つに、いわゆる「法藏説話」の導入をあげることができる。すなわち『寿經』で言えば、阿弥陀仏が仏となる以前に、世自在王仏の感化により、国王の位を捨て出家し法藏という比丘となり、自身が理想とする仏の在り方、自身の仏国土の在り方について、世自在王仏が提示する二百一十億の仏国土を参考に四十八通りの在り方を選択。世自在王の御前で、その一つ一つを自らの願いとして掲げ、それらが実現できないようなことがあれば仏になるわけにはいかないとの誓いを建てた。これが四十八願の説示であり、誓願のすべてを達成し仏となり西方に自身の仏国土を建立しているのが法藏説話である。

仏になる以前に誓った願いが本願であるが、無量寿經群においては經典により本願の内容に異同があり、その数もおよそ三通りに分類される。初期無量寿經では二十四願が説かれ、後期無量寿經では『寿經』や『如来会』などに四十八願、『莊嚴經』に三十六願が示される。

さて、初期無量寿經の二十四願においては『寿經』第三十一願に对照される願文がないものの、『如来会』や『莊嚴經』に对照され得る願文を見出すことができる。

まず四十八願を保持する『如来会』では、やはり『寿經』と同じく第三十一願に、

【『如来会』第三十一願】

若我成佛國土光淨遍無與等徹照無量無數不可思議諸佛世界如明鏡中現其面像若不爾者不取菩提¹⁴
とある。参考までに『浄土宗全書』に従った書き下し文を示しておく。句点は筆者による。

【書き下し文】

若し我れ成佛せんに、國土の光淨遍くして與に等しきもの無く、徹照すること無量無數不可思議にして、諸佛世界、

明鏡の中に其の面像を現するが如くならん。若し爾らずんば、菩提を取らじ。

この願は成仏後の自身の国土について誓うものであり、「鏡をモチーフとした比喩」が用いられ、文章構造、文脈から言っても『寿経』第三十一願とパラレルな関係を有していることに疑いはない。

さて件の『寿経』「観」については、ここでは「現」という語が対照される。「観」に含意される「しめす」「あらわれる」を想起させるには十分な表現である。では「明鏡」が主語になるのかという点と否である。むしろ「明鏡中」とあることから、「明鏡」が「面像」の所在を示す補語であることが明示されている。結果、「現」の主語、動作主はここでも示されず、不特定の誰かが予想されるだけなのである。

ちなみに『寿経』「照見」には「徹照」という語が対照されている。この「徹照」の主語、動作主については「国土の浄光」であると読み取ることができ、また目的語に「無量無數不可思議諸佛世界」が据えられている。その諸佛世界は比喩においては「面像」に対応し、そこでの動詞には「現」という語が据えられている。したがって「徹照」には「現」に対応する意味があると考えられるが、「現」が意味する「あらわれる、あらわす」（前出『字通』）は「可視化される、可視化する」と言い換えることもできよう。「国土の浄光」は「諸佛世界」を可視化し、「諸佛世界」は「国土の浄光」によって可視化されると読み取ることができよう。

次に『莊嚴経』を見てみよう。『莊嚴経』では第二十五願に、

【『莊嚴経』第二十五願】

世尊我得菩提成正覺已所居佛刹廣博嚴淨光瑩如鏡悉能照見無量無邊一切佛刹衆生觀者生希有心不久速成阿耨多羅三

藐三菩提¹⁵

とあり、「鏡」「照見」「觀」という語を見出すことができる。ここでも参考までに『浄土宗全書』に従った書き下し文を

示しておく。句点は同じく筆者による。

【書き下し文】

世尊。我れ菩提を得、正覺を成じ已らば、所居の佛刹廣博にして嚴淨の光瑩なること鏡の如く、悉く能く無量無邊一切佛刹照見せん。衆生の觀ん者、希有の心を生じ久しかたずして速かに阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。

『寿経』や『如来会』においては、「明鏡」「面像」「觀る」もしくは「現ずる」といった文節から成る「鏡をモチーフとした比喩」が用いられているが、ここでの比喩は「鏡の如く」と一文節のみに止まり、「面像」を欠く。とはいえ「觀る」の動作主として「衆生」を据え、「鏡」を動作主と解する道を閉ざしている。ちなみに『寿経』や『如来会』では、このように動作主を据える構文を見ることはできないものの、兩経においても視覚を有する動作主の存在が想定されており、ここでの「觀」の場合も「しめす、あらわれる」ではなく「見る」の意味で理解するのが適切であると思われる。なお比喩中に「面像」を欠くこの願文においては、「觀」の目的語が示されていないが、文脈上、目的語に「無量無邊一切佛刹」を求めていると言っている。

そもそも、この「無量無邊一切佛刹」は実際のところ「照見」の目的語であり、ここでの「照見」は『寿経』「照見」と対照されるが、「一切仏刹」については引き続き「觀」の目的語となり、次の文節に組み込まれていると読み取れる。「一切仏刹」が見られる側に位置すると示唆されているのである。また「照見」の動作主は「所居の仏刹」の「光瑩」であると読み取れ、「鏡の如く」という比喩表現は「所居の仏刹」の「光瑩」の「照見」について修飾するのである。

『莊嚴経』においては、衆生が「所居の仏刹」の「光瑩」が「鏡の如く」「照見」したものを「見る」ことができるよう誓われている、と読み取れよう。

以上、「鏡をモチーフとした比喩」について、『寿経』に引き続き『如来会』と『莊嚴経』を考察してみた。結果、い

ずれにおいても「鏡」が主語、動作主としての位置付けにないことが確認された。このことにより『寿経』「諸仏世界」が「照見」(映し出す)の目的語であるといふことだけではなく、それを「観る」者の存在が予想され、見られる側に位置付けられることが支持されるのである。なお加えて、このことは『梵本』からも支持することができる。

『梵本』は四十八願に一願足りない四十七願を保持する。そのうち『寿経』第三十一願に对照されるのが第三十願である。ひとまず『梵本』の願文を示してみる。

【『梵本』第三十五願】

sacem me bhagavan bodhiprātsya. naivaṃprabhāsvāraṇ tad buddhakṣetraṇ bhaved. yatra samantād
aprameyāsankhyeātintyāuparimāṇāni buddhakṣetrāṇi samdiyeraṇ. tad yathāpi nāma sunarimṣṭa
ādarsamaṇḍale mukhamaṇḍalaṃ. mā tāvad ahaṃ anutarāṇ samyksam̐bōdhiṃ abhisam̐budheyam.⁹⁶

参考までに岩波文庫『浄土三部経(上)』による和訳を提示する。

【『梵本』和訳】

世尊よ。もしも、わたくしが覺りを得た後に、かの仏国土が、たとえばよく磨かれて清らかな円鏡の中に映った顔面のように、その中にあまねく無量・無数・不可思議・無比・無限の諸仏国土が見られ得るような、輝かしい光あるものとならないようであつたら、その間わたくしは、この上ない正しい覺りを現に覺ることがありませんように。⁹⁷

このうち『寿経』「照見」に对照されるのが、「見られ得る」(傍線部)と和訳されている(samdiyeraṇ) (傍線部)である。これは「見る」を第一義的な意味に有する動詞 *san̐* / *dr̐s* の、文法的には受け身(受動態)の願望法・三人称・複数を示し、主語に複数形を示す諸仏国土 (buddhakṣetrāṇi) を求める。願望法は「可能」も含意し、和訳にあるとお

り「諸仏国土」は確かに「見られ得る」対象であり、見られる側に位置付けられると指摘できるのである。

なお「見られ得る」という受け身の表現について、表現の視点を試しに見られる側から見る側に移して訳そうとするならば、主語を「諸仏国土」とし、動詞については受動態から能動態に変換してみることになる。その場合には諸仏国土が「眼に映るようになる」「現れる」などといった訳語を当てることになる。『寿経』「照見」の意味する「映し出す」を想起させるが、実際、動詞 *sañv* *dis* を受け身で用いる場合にも、「眼に見えてくる (to become visible)」「現れる (to appear)」とどう意味がある¹⁸とされる (Apte “The Practical Sanskrit-English Dictionary”)。

『梵本』第三十願においては明らかかなことは、無量寿仏の仏国土には輝かしい光があり、そのような仏国土には、喻えれば丸い鏡をのぞけばその中に丸い自分の顔が映るように諸仏国土が見られ得るようになる、換言すれば可視化されるようになる、現れるようになる¹⁹と誓われているのである。

ところでサンスクリット、いわゆる梵語による文章においては「能動態よりも受動構文が愛用され¹⁹と評されるが、その場合、動詞が受動態で示される一方、動作者が欠落することがある。ここでは動詞 *sañv* *dis* の動作主が欠落しているが、この「諸仏国土」はいったい誰によって見られるのであろうか。この点については『梵本』だけにとどまらない問題である。

四、十方の浄土を見る菩薩 ～『寿経』第四十見諸仏土願とその異本～

『寿経』四十八願を読み進めてみると、じつはもう一度「鏡をモチーフとした比喩」に巡り逢うことができる。それが第四十見諸仏土願である。願文を書き下し文とともに提示してみる。

【『寿経』第四十見諸仏土願】

設我得佛國中菩薩隨意欲見十方無量嚴淨佛土應時如願於寶樹中皆悉照見猶如明鏡觀其面像若不爾者不取正覺²⁰

【書き下し文】

もし我れ佛を得たらんに、国中の菩薩、意に随つて十方無量嚴淨の佛土を見んと欲せば、時に応じて願のごとく、宝樹の中において、みな悉く照見せんこと、なおし明鏡をもつて、その面像を觀るがごとくならん。もししからずんば、正覺を取らじ。²¹

ここでは「十方無量嚴淨の佛土」が「面像」に喩えられ、第三十一願の「十方一切無量無數不可思議の諸佛世界」に对照されるが、先に第三十一願において「照見」の目的語である「諸仏世界」について、それを「觀る」者の存在が想定され、また「諸仏世界」は見られる側に位置すると指摘した。

ここでは「国中の菩薩」が「十方無量嚴淨の仏土」を「見んと欲」すとあるように、まさに第三十一願で予想される動作主として「十方の仏土」を見る「菩薩」の存在が明らかにされ、同時にまた「十方の仏土」が菩薩に見られる側、觀察される対象であることが明確に打ち出されているのである。

第三十一願に無量寿仏の仏国土が諸仏世界を照見するようにと誓われているのは、国中の菩薩が「十方の仏土」について、それを見なければ見たい時に宝樹の中に「照見」するようにするという、この第四十願の環境を整えるためであったと言えるだろう。第三十一願と第四十願は一对一組の誓願であると評価すべきなのである。

ところで極楽においては「国中の菩薩」によつて「十方無量嚴淨の仏土」が見られる²²、すなわち觀察されるが、『寿経』以外の無量寿経ではどうなっているのだろうか。蛇足のようなではあるが、確認をしておきたい。

『寿経』第四十願に对照できる誓願としては、まず『如来会』第四十願をあげることができる。『如来会』第四十願の願文は以下の通りである。

【如来云】第三十一願】

若我成佛國中群生隨心欲見諸佛淨國殊勝莊嚴於寶樹間悉皆出現猶如明鏡見其面像若不爾者不取菩提²³
この願についても『浄土宗全書』に従い書き下してみる。句読点は筆者による。

若し我れ成佛せんに、國中の群生、心に隨いて諸佛の淨國、殊勝の莊嚴を見んと欲せんに、寶樹の間に於いて悉く皆な出現し、猶し明鏡に其の面像を見るが如くならん。若し爾らずんば菩提を取らじ。

『寿経』「国中の菩薩」については、ここでは「国中の群生」となっているが、群生が見たいと思った「諸仏の淨國、殊勝の莊嚴」が「宝樹の間に於いて」「悉く皆な」「出現」とすると読み取れるのであり、『寿経』「照見」についてはここでは「出現」となっているものの、「諸仏の淨國、殊勝の莊嚴」が群生によって觀察される対象であることは明らかと言えよう。

次に『梵本』においても『寿経』第四十願に対照される誓願を見ることができる。すなわち第三十九願がそれである。以下に『梵本』の願文を示してみる。

【『梵本』第三十九願】

sacem me bhagavan bodhiprātsya. tarta buddhaksetre ye bodhisattvāḥ pratyājātās. te yathārūpam
buddhaksetraguṇālamkāravayūham ākāmkṣeyus. tathārūpam nānāratnavṛkṣebhyo na samjānīyur.
mā tāvad aham anuttarāṃ samyksambodhim abhisambudheyam.²⁴

これまた参考までに岩波文庫『浄土三部経（上）』による和訳を提示する。

【『梵本』和訳】

世尊よ。もしも、わたくしが覺りを得た後に、かの仏国土に生まれた求道者たちが、希望する通りの仏国土のみご

とな特徴や装飾や配置を、さまざまな宝石のあいだから気づき認めることができないようであつたら、その間わたくしは、〈この上ない正しい覚り〉を現に覚ることがありませんように。²⁵

『寿経』第四十願、『如来会』第四十願はともに「鏡をモチーフとした比喩」を用いるが、ここではその比喩を欠く。とはいえ『寿経』第四十願の前半部分は『梵本』の願文と概ね対照される。ここで傍線部に対照される『寿経』第四十願の書き下し文をあらためて提示してみる。

国中の菩薩、意に随つて十方無量嚴淨の佛土を見んと欲せば、時に応じて願のごとく、宝樹の中において、みな悉く照見せん。

このうち『梵本』〈yathārūpan / ākāṅkṣeyus, tathārūpan〉は和訳〈希望する通りの〉、『寿経』〈意に随つて…見んと欲せば〉と対照され、〈buddhakseṭraguṇālanīkāryūṭham〉は和訳〈仏国土のみごとな特徴や装飾や配置を〉、『寿経』〈十方無量嚴淨の佛土を〉と対照され、〈nānarāṇavikṣeḍhyo〉は和訳〈さまざまな宝石のあいだから〉、『寿経』〈宝樹の中において〉と対照され、〈saṃjānyur〉は和訳〈気づき認めることができ〉、『寿経』〈照見せん〉に対照される。

さて〈照見〉に対照される〈saṃjānyur〉を文法的に説明するならば、動詞 sañj「ja」の能動態・願望法・三人称・複数で、主語に〈bodhisattvāḥ〉(菩薩たち)を据え、目的語に〈buddhakseṭraguṇālanīkāryūṭham〉を置いている。なお藤田宏達氏はこの語の前後を含め「どのような仏国土の功德の嚴飾・莊嚴を欲しよう」と²⁶と試訳する。この語をどのように解釈するのは難しいところではあり、この語が『寿経』〈十方無量嚴淨の佛土〉とパラレルに対応するかは、なおも検討を要すると思われる。ともあれ、この語を目的語とする sañj「ja」の意味としては「知る (know)」「理解する (understand)」「気付く (be aware of)」「認識する (recognise)」「観察する (watch)」などがあげられる (Apte 前掲書)。まさに「知見」「観察」であり、仏国土は知見、観察される側に位置付けられる。『梵本』第三十九願では、菩薩

がみずから望むところの仏国土の様相を知見できるようにと誓われているのである。

以上、異本の願文を考察してきたが、ここで今一度『寿経』に立ち戻って、第三十一願と第四十願の関係を確認しておこうと思う。

『寿経』第三十一願において、無量寿仏はみずからの国土（極楽）が諸仏の世界を映し出せるようにと誓った。しかも、その世界について明鏡の鮮明な画像を見るが如くであるようにと誓ったのである。では、何故に極楽が諸仏の世界を映し出せるように誓ったのか。それは極楽の菩薩たちに諸仏世界を見せるためなのである。それが第四十願であり、無量寿仏は極楽の菩薩たちが、見たいと望むのであれば、その望みに沿った仏土についてはさまざまな宝樹から見えるようにしようと誓ったのである。もちろん、その仏土については第三十一願を承け、明鏡の鮮明な画像を見るが如くであるようにと誓っているのである。

さて、ここで重要なことは、極楽にとって極楽以外の仏国土が極楽においては菩薩たちによって観察されるべき世界として位置付けられている点である。極楽は他の仏国土の様相を明鏡に映る画像、あるいは動画のように取り込んでいくのである。

五、菩薩が仏土を見る動機

江戸時代の浄土宗の学僧、義山（一六四八―一七一七）の講録『無量寿経随聞講録』における第三十一願の解説に、第三十一願下言願意者所見土中或土依報不清淨故不現十方或土莊嚴清淨如鏡十方佛刹於中而現法藏欲令國土清淨選擇此願攝國土也澄憲云上有天眼徹視之願是約能見衆生之德今有猶如明鏡之願理須約國土之德²⁷と願意が示されている。大意を示すならば、

世自在王仏が法蔵に見せた二百一十億の仏土の中には、仏土の様相が清浄でないがために十方の仏国土が現れない仏国土があり、あるいは仏土の様相が清浄でまるで鏡のようにで、そこに十方の仏国土が現れる仏国土があった。法蔵は自身の仏国土についてもそのように清浄な世界であるようにとこの願を選択し、自身の仏国土に採り入れようとしたのである。これについて澄憲は、この願に先行して天眼徹視の願（第六願）が配されているのは「よく見通す能力」について自身の仏国土における衆生の徳とし、今ここに猶如明鏡の願（第三十一願）が配されているのは、自身の仏国土の徳について誓うためである、とする。

ということであり、義山は第六願と第三十一願を一对の誓願であると読み取る澄憲の見解を紹介する。「十方無量厳淨の仏土」を見るには、極楽の菩薩に具わる天眼智通の能力と極楽に具わる諸仏世界を照見する機能の、その双方が求められるのである。

ともあれ菩薩は、菩薩自身の能力と極楽に具わる機能が相俟って「十方無量厳淨の仏土」を見るものと思われるが、それにしても極楽の菩薩は何故に「十方無量厳淨の仏土」を見たいと欲するのであるのか。この点についても義山の解釈が参考になる。

義山は第三十一願「諸仏世界」について、

諸佛世界者可通淨穢寶樹觀文亦其證也謂彼土菩薩依意願淨穢俱照見スベシ大悲心起則現穢土悲心敗衆生故見之發下化心上求心起則現淨土見之尚求佛果法藏願意清淨國土欲現穢土亦現其理無妨《已上鈔意》問師云局淨非穢斯乃國土清淨現無量土如因陀羅網《二藏義廿二卷二十紙》言既清淨國土故不通穢也今謂論註下釋地功德云此莊嚴事如淨明鏡十方國土淨穢諸相善惡業緣一切悉現彼中人天見斯事故探湯不及之情自然成就寶樹觀文經釋《今家疏》明通淨穢若準此等經釋通淨穢義可爲正歟²⁸

と言及する。大意を示すならば、

「諸仏世界」は浄土と穢土の双方に通じている。また『観経』宝樹觀の文がその典拠となる。いうなれば、極楽浄土の菩薩は自身が思うところにしたがって、浄土・穢土のどちらも把握することができる。大悲心を起こす時は穢土が現れ、その悲心により穢土の衆生を哀愍することから穢土の衆生を見て衆生を導こうという下化心を起こす。覺りを究めようという上求心を起こす時は浄土が現れ、それを見てあらためて覺りの境地を目指す。法藏の願意は清浄な仏国土が現れることにあるが、浄土を現そうとすると穢土もまた現れる。そうした道理を妨げる術はない（以上、鈔意）。聖阿闍梨は極楽浄土に現れるのは浄土だけであり穢土ということではなく、国土の清浄は無量の土をインドラ網のように映し出す（『釈浄土二藏義』）とする。その言うところは、すでに清浄な仏国土であるが故に穢土に通じることはない、ということである。今、『論註』下で、地の功德を解釈するに、この極楽浄土における様相は汚れなく清らかな明鏡のようなもので、あらゆる仏国土における淨穢の諸相、善悪の業縁、その一切がごとごとく現れる。極楽浄土の人天はそうした事物を見るが故に、探湯（くかたち）を恐れて悪事には手を引つ込め、善事を見ては及ばずながらも手本にしようという思いが自然と醸成される、とある。いわんや『観経』宝樹觀の文の経釈（善導の疏）は浄土・穢土に通じていることを明かしている。かりにこの経釈を基準とするならば、浄土穢土に通じているということを示すべきではなからうか。

とこうことになる。

義山が記す解釈にしたがえば、願文における「諸仏世界」とは浄土のみならず穢土も含み、極楽は淨穢、善悪にかかわらずすべての世界を映し現し出す。そして極楽浄土の菩薩が大悲心を起こす時は穢土が現れ、上求心を起こす時は浄土が現れる。菩薩はその双方を把握し、一方で下化心を起こし、一方で仏果を求めめるのである。

第三十一願において極楽に諸仏世界が映し出され、第四十願において極楽の菩薩が十方無量厳淨の仏土を見よう欲するのは、菩薩が菩薩行を修する動機を得るため、さらにはたもち続けるためと言えよう。無量寿仏は菩薩に常に菩薩行を修めるよう求め、極楽にその環境を整えようと誓っていたのである。

六、結びにかえて

極楽浄土に存在する者（すなわち菩薩）が他の世界と関係を持つことは可能なのか。もし可能であれば極楽の菩薩は他の世界と共生する関係を築こうとするのではないか。本稿では、そうした可能性を求め、極楽の菩薩と他の世界との接触がどのように生じるのか、『寿経』に示される無量寿仏の四十八願中、第三十一国土清淨願と第四十見諸仏土願に着目した。その結果、極楽浄土以外の諸仏国は極楽において、極楽の菩薩たちによって観察されるべき世界であるとの結論を導いた。この際、注目されるのが他の世界を見たいと思うようになる菩薩の動機である。『寿経』第四十願に「意に随つて十方無量厳淨の佛土を見んと欲せば」とある。この「意に随つて」について義山が解釈を施すことはないが、先の義山の言葉を借りれば、菩薩が「大悲心を起こす」につれ、あるいは「上求心起こす」につれ、ということになるだろう。

大悲心を起こして穢土の衆生を哀愍し、導こうという下化心を生じる。上求心を起こして浄土を観察し覚りを目指す。そうした心境の先に、穢土との共生、他の仏土との共生が予想されるのである。無量寿仏の第三十一願及び第四十願の成就が、極楽の菩薩をして諸仏世界（穢土を含む）との共生に向かわせようとし、そこに諸仏世界との共生について可成生を指摘することができるのである。

それにしても極楽の菩薩は何故に「意に随つて」他の浄土を見ようと思ひ立つのであろうか。あくまでも筆者の私見

であるが、無量寿仏における第五宿命智通願の成就により往生以前の遙か昔の記憶を宿している極楽の菩薩は、同じく第六天眼智通願の成就により、かつて縁を結んだ人々の現在、未来について知ることができる。そして、そうした人々のことが思い起こされる時、他の世界を見てみようと思いい立つのではなろうか。無量寿仏は、そうした菩薩の心情を知ればこそ第三十一願、第四十願をお誓いになったと、そう思うのである。

注

- 1 東海学園大学共生文化研究所「共生文化研究」(創刊号、二〇一六)
- 2 願文に「設我得佛國中人天不識宿命下至不知百千億那由他諸劫事者不取正覺」とある。(『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四～二五頁)
- 3 願文に「設我得佛國中人天不得見他心智下至不知百千億那由他諸佛國中衆生心念者不取正覺」とある。(『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二五頁)
- 4 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二四～二六頁
- 5 願文に「設我得佛國中人天不得天眼下至不見百千億那由他諸佛國者不取正覺」とある。(『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二五頁)
- 6 願文に「設我得佛國中人天不得天耳下至聞百千億那由他諸佛所說不悉受持者不取正覺」とある。(『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二五頁)
- 7 「阿惟三菩提品」に「初夜入正受 憶念過去生 從某處某名 而來生於此 如是百千萬 死生悉了知 受生死無量 一切衆生類 悉曾爲親屬 而起大悲心 大悲心念已 又觀彼衆生 輪迴六趣中 生死無窮極 虛偽無堅固 如芭蕉夢幻」(『大正新脩大藏經』第四卷、二六一～二七頁)とあるように、成道に向け宿命智通を得た釈尊は、衆生がこれまで六趣を輪廻してきた様子を觀察したとされる。

- 8 長野市の浄土宗大本山善光寺大本願内道心会の月例勉強会（教学研修）において講師役を勤め、平成二十七年二月より四十八願の精読を始めた。
- 9 願文に「設我得佛自地已上至于虚空宮殿樓觀池流華樹國中所有一切萬物皆以無量雜寶百千種香而共合成嚴飾奇妙超諸人天其香普熏十方世界菩薩聞者皆修佛行若不如是者不取正覺」とある。（『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、三三三―三四頁）
- 10 聖阿闍梨『浄土二藏二教略頌』（『浄土宗全書』第一二卷）九頁上～下参照
- 11 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、三三三頁
- 12 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二二九頁
- 13 ちなみに前出の注7「仏所行讚」の続きには「即於中夜時 逮得淨天眼 見一切衆生 如觀鏡中像 生生生死 貴賤與貧富 清淨不淨業 隨受苦樂報……」（『大正新脩大藏經』第四卷、二七頁）とあり、成道に向け天眼を得た釈尊は、衆生が生死を繰り返す様子をまるで鏡に映った画像を見るように観察したとされる。
- 14 『浄土宗全書』第一卷、一四七頁下～一四八頁上
- 15 『浄土宗全書』第一卷、一七〇頁上
- 16 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』、永田昌文堂、一九八四、一三三頁
- 17 中村元・早島鏡正・紀野一義訳注『浄土三部經（上）』、岩波書店、一九九一、四三頁
- 18 ちなみに実際のところ、義山『無量壽經隨聞講録』は「照見十方等者諸佛世界於光中現」（『浄土宗全書』第一四卷、三三八頁下）と
いうように「照見」を「現」と解する。
- 19 辻直四郎『サンスクリット文法』、岩波書店、一九八一、二五二頁
- 20 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、三六～三七頁
- 21 『浄土宗聖典』第一卷、浄土宗、二二一頁
- 22 義山『無量壽經隨聞講録』は「照見者若就機欲則唯見嚴淨佛土也若約樹德則遍現淨穢也」（『浄土宗全書』第一四卷、三四七頁下）というように「照見」について、「見」と解する菩薩の立場があることを示している。
- 23 『浄土宗全書』第一卷、一四八頁下
- 24 香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』、永田昌文堂、一九八四、一四二頁

- 25 中村元・早島鏡正・紀野一義訳注『浄土三部経(上)』、岩波書店、一九九一、四六頁
26 藤田宏達『梵文無量寿経試訳』、東本願寺出版部、一九七二、五五頁
27 『浄土宗全書』第一四卷、三三八頁下
28 『浄土宗全書』第一四卷、三三九頁上

参考文献

・藤田宏達『原始浄土思想の研究』、岩波書店、一九七九

キーワード 無量寿経 第三十一国土清浄願 第四十見諸仏土 照見 明鏡

(そでやま えいき 浄土宗総合研究所 主任研究員)